

十八世紀英国における牧歌風バラッド

海老澤 豊

十八世紀初頭の英国で牧歌に二つの潮流が生じた。ひとつはウェルギリウスを模範としたポープの古典的牧歌であり、もうひとつはスペンサーに倣ったフィリップスの英国風牧歌である。いずれも田園を舞台として、羊飼いが恋の悩みを告白し、歌合戦に興じる。だが以下に説明するように、相違点は少なくない。

ポープの『牧歌集』は四篇から構成され、各々の牧歌には春夏秋冬という季節、朝昼夕晩という一日の時間帯が割り当てられている。古典牧歌の影響が強く感じられ、羊飼いの名前は大半がウェルギリウスの牧歌からの借り物である。第一牧歌には黄金時代の片鱗が残っているが、作品が進むにつれて牧歌世界も凋落の一途を辿る。

これに対してフィリップスの『牧歌集』はスペンサー風の前代古語や方言を多用し、描かれる風景や動植物は英国産のものばかりである。羊飼いたちも英国の田園に住む、いささか卑しさと色好みが目立つ者たちで、英国の風習や迷信が頻繁に取り上げられる。ポープの牧歌を古典的と呼ぶならば、フィリップスの牧歌は英国的なのである。

ポープの盟友ゲイはフィリップスの英国風牧歌を茶化する目的で『羊飼いの一週間』を書いた。一段と卑俗さを増した羊飼いたちは、古典牧歌に頻出するモチーフをひねり、フィリップス風の俗語や方言を話し、いかにも馬鹿げた行動に明け暮れる。三篇のなかで最も諧謔味の強い牧歌だが、生き生きとした描写は抜きん出ている。

時代を経るに従って、詩人たちは牧歌をさまざまな形に変容させた。作品の舞台は田園から都会、海浜や川辺、はては異国にまで拡大された。歌い手も羊飼いや農夫から都市の有産階級や下層労働者、漁師や釣人、黒人奴隷やハーレムの美姫などにその役割を譲った。牧歌の主題も諷刺的な傾向が強まり、牧歌世界を崩壊に導く戦争の惨禍が描かれ、奴隷制度に対して異議が申し立てられる。古典牧歌に見られた黄金時代やアルカディアは消失し、牧歌は根本的に変貌していった。

ただし伝統的な「田園風牧歌」が完全に廃れたわけではない。確かにテオクリトスやウェルギリウスの古典牧歌、スペンサーの『羊飼いの暦』など、それまで盛んに模倣された作品の影響が次第に薄れていったことは事実である。代わりに二番煎じとも微温的ともいえるが、田園を舞台にした牧歌風バラッドが生み出され続けた。本稿ではリトルトンの「愛の進展」、シェンストンの「牧歌風バラッド」、カニングラムならびにウィリアムズの牧歌を取り上げ、その特色を探る。

(1) リトルトンの「愛の進展」

準男爵家に生まれ、政府の要職を歴任したジョージ・リトルトン(1709-1773)は、ポープやシェンストン、トムソンらと交友関係にあり、文学者たちのパトロンとしても活躍した。彼が匿名で出版した「愛の進展」(1732)は、「疑念」「希望」「嫉妬」「占有」と題された連続する四篇の牧歌で構成され、デイモンとディーリアの恋が曲折を経ながらも深まっていくさまを描く。従来牧歌集では同じ羊飼いが全篇を通じて登場することはなく、その意味で新たな試みと言える。リトルトンは1731年11月のドディントン宛書簡で、この作品は「私がとても重んじている友情の結果」と記し、草稿の段階でポープの添削を受けたことを明らかにしている。(1)

ジョンソン博士は「愛の進展」について「牧歌であるというだけで十分非難に値する」とまで評している。(2)しかし「愛の進展」は発表以来さまざまなアンソロジーに採られており、ドズリーの『詩選集』(1748)第二巻の冒頭を飾るなど、当時かなりの人気を博したことは確かなようである。(3)後にシェンストンが「愛の進展」を意識して「牧歌風バラッド」を書いたことも、また疑う余地がない。

第一牧歌「疑念」では、戯れに満ちた街や壮麗な宮廷という陽気な場所を避け、「垂れ下がる木蔭が銀色の流れを眺める、わびしい森の緑なす縁」(To the green Margin of a lonely Wood, / Whose pendant Shades o'erlook'd a silver Flood, ll. 13-4)に引きこもったデイモンが、羊の世話をおろそかにして、ディーリアへの恋情をニンフやドライアドに訴える。(4)煩雑な都会を離れて静かな田園を求めるのは牧歌の常套であり、川の流れる森の描写は古典牧歌の「心地よい場所」を思わせる。ところがリトルトンは自然描写をあっさりと切り上げ、従来牧歌ではあまり見られなかった「野心」「激怒」「嫉妬」「中傷」などの擬人法を多用する。

羊飼いたちが緑地で踊りに興じた際に、ディーリアがデイモンだけに手を差し出したために、彼は彼女が自分を選んだと思ひ込み、周囲の者たちも同じ印象を抱い

た。だがデイモンがディーリアに情熱を打ち明けると、彼女は掌を返したように冷淡に聞き流す。かくしてデイモンはディーリアの心情を量りかねて煩悶するが、最後には「軽蔑と見えたのは単なる慎ましさ」(‘Twas only Modesty that seem’d Disdain, l. 85)であったと、自分に都合の良い解釈をして疑念を追い払う。

第二牧歌「希望」は恋に浮かれたデイモンの戯言に満ちている。彼は遠い島からやってきたカナリアや、ペルーの鉱山に眠る宝玉をディーリアに贈り、それでもだめならアポロンやパーン、ニンフたちが二人の恋に助力してくれるだろうと語る。第三牧歌「嫉妬」で、ディーリアが別の男と手に手をとって草地を歩くのを見たことから、デイモンは彼女を忘れようとして喚きたてる。しかしディーリアが一人で歩む姿を見た途端に、デイモンは彼女のもとに駆け寄り、「彼女が愛情を持ち、誠実だとすぐに信じた」(He found her Kind, and soon believ’d her True, l. 96)のであった。

最後を締めくくる第四牧歌「占有」は、ヴィーナスに捧げられた田園の祭壇を前にして、デイモンがディーリアと結ばれるさまを描く。ともに白髪が生えるまでお互いを慈しみ、死しては同じ一つの墓に入ろうという件も、他の牧歌には見られない要素である。ただし四篇すべてがデイモンの視点から語られており、ディーリアの心情は一向に伝わってこない。彼女が本当に存在するかを疑うことさえ可能である。

「愛の進展」はテオクリトスの第十一歌「キュクロプス」とウェルギリウスの第二牧歌「アレクシス」に着想を得たと考えられる。(5) 前者は一つ目巨人ポリュペモスが海精ガラテイアへの満たされぬ思いを存分に歌って、エロスの狂気から逃れるという「歌による癒し」を主題にしている。また後者は前者を模倣した作品であり、羊飼いコリュドンが美青年アレクシスへの報われぬ愛を歌い、最後には別のアレクシスが見つかるだろうと自分に言い聞かせる。

リトルトンの第一牧歌「疑念」ではデイモンが「治し方の分からない苦痛」(the Pain thou know’st not how to cure, l. 52)すなわちエロスに悩まされ、第三牧歌「嫉妬」で彼はディーリアへの贈り物を列挙する。これらの点は「キュクロプス」や「アレクシス」の模倣であるが、似ているのはここまでである。テオクリトスとウェルギリウスが失恋を主題にしている一方で、リトルトンは説得力に乏しい流れでデイモンとディーリアをめでたく結びつけてしまう。

ところで「愛の進展」と同時期に書かれた短詩にもディーリアが登場するが、こちらはいずれも愛の成就には至っていない。(6) ソング「ディーリアが野原に姿を

見せると」では、彼女はあらゆる男に網を広げる、私は憎もうとしたが、無駄であった」(Her nets she spread for every swain, / I strove to hate, but vainly strove, ll. 18-9)とあり、また別のソング「重苦しい時が過ぎ去ろうとする」でも、語り手はディーリアと別れた後で、再会することを願うと同時に恐れている。さらに「エレジー」では、ディーリアの愛しい面影を冷静に拭い去ることに耐えられようかと歌われる。ディーリアのモデルに関する議論もあるが、人物の特定はなされていない。(7)「愛の進展」はリトルトンの願望が込められた例外的な作品なのであろう。

(2) シェンストンの「牧歌風バラッド」

ウィリアム・シェンストン(1714-63)が暮らした地リーゾーズは、リトルトン男爵家の館があるハグリーに近接しており、身分こそ異なるものの、両者は詩歌と造園という同じ趣味で結ばれていた。シェンストンの「牧歌風バラッド」(1743)は、リトルトンの「愛の進展」と同様に、四篇の牧歌「不在」「希望」「孤独」「失望」から構成されており、彼が隣人の先行作を意識していたことは間違いない。

ただし二つの作品は形式面で異なる。「愛の進展」は弱強五歩格のカプレットで書かれているが、「牧歌風バラッド」は弱弱強で四歩格の八行(4A4B4A4B4C4D4C4D)という詩形を持つ。この詩形はシェンストンが称賛していた、ニコラス・ロウの短詩「コリンの嘆き」から借用したものである。(8) この詩は「絶望する羊飼い」と呼ばれることも多く、スペンサーの『羊飼いの暦』でロザリンドへの報われない恋に苦悩するコリン・クラウトの嘆きを模倣している。羊飼いのコリンは小川の畔に横たわって、不実なニンフに想いを寄せたことを後悔し、彼女が別の羊飼いに心移したことをなじり、笛も月桂樹も捨て、ひっそりと死ぬことを願う。

親友グレイヴスの書いた回顧録によれば、シェンストンはG嬢(グレイヴスの妹と解されている)と別れたことで「牧歌風バラッド」の着想を得て、ロウの用いた詩形で作詩を始めた。さらにシェンストンは数年後の1743年夏に、保養地チェルトナムで出会ったC(カーター)嬢に惚れこんだが、その地を泣く泣く去らざるを得ず、「牧歌風バラッド」をふくらませて四部構成にしたという。(9) 『シェンストン作品集』(1764)に序文を寄せたロバート・ドヅリーは、シェンストンのエレジーと牧歌の大半は「彼自身の心の状況を正確に写したもの」だと述べている。(10)

シェンストンが親友ジェイゴーに宛てた1743年7月の書簡に「牧歌風エレジー、あ

るいは君がもっと適切だと思うなら、牧歌風バラッド」を送るという一節がある。ただし年末のグレイヴス宛書簡には「君の忠告に従ってバラッドに手を入れるつもりだ。三部に分けて、少なくとも一連か二連は付け足す」とあり、翌年3月のジェイゴー宛書簡には「バラッドは今やかなりの変身を遂げた」と記されている。(11) 要約すれば、「牧歌風バラッド」が1743年夏に書かれたことは確かで、少なくとも三種類の初期稿を経て、(12) 最終的に1755年のドズリーの『詩選集』第四巻の掉尾を飾ることになった。(13) 本論ではこの55年版をテキストに選ぶ。

「牧歌風バラッド」も「コリンの嘆き」や「愛の進展」と同様に、恋する女性に捨てられた男が独白するという形を取っている。第一牧歌「不在」で羊飼いコリドンは愛するフィリスと別れたことを嘆く。取り立てて優れた詩行もないが、第一連はトマス・アーンによって曲がつけられ、『詩選集』第四巻の巻末にその楽譜が収められた。後にシェンストンは他の三篇にも曲をつけるようにアーンに依頼したが、報酬や著作権のために交渉は難航した。(14)

第二牧歌「希望」は伝統的な牧歌に最も接近しており、自然に満ちた「心地よい場所」の描写が中心となる。川畔では蜜蜂が羽音を立て、洞穴は木々に覆われ、丘は羊の群れで真白に染まり、苔に縁取られた泉にはホタルブクロやスマレが咲き誇る。ただしシェンストンが描くのは、彼の造園趣味を反映するかののように、造られた自然である。「小川も澄んで清らかではないが、金魚たちで輝いている」(Not a brook that is limpid and clear, / But it glitters with fishes of gold. ll. 15-6) や、「彼女が灌木を褒めるのを聞いたことはないが、私は急いで灌木をそこに植えたのだ」(Not a shrub that I heard her admire, / But I hastened and planted it there, ll. 19-20)といった具合だ。

またコリドンが「私は恋人のために贈り物を見つけた、モリバトが雛を産んだ場所を見つけたのだ」(I have found out a gift for my fair; / I have found where the wood-pigeons breed, ll. 33-4) と語る一節は、ウェルギリウスの第三牧歌で「贈り物を恋人のために取ってある。モリバトが天高く巣をかけた場所に、自分で印をつけておいたのだ」(68-9行)とダモエタスが歌う箇所模倣であろう。しかしフィリスは野蛮な行為だと言って顔を背けるだろうという落ちがつく。

第三牧歌「孤独」でフィリスが心移した羊飼いはパリデルだと明らかにされる。髪を巻き毛にして整え、笛に魔法を宿したパリデルは、不実な情熱に輝いて、耳に快い物語を語る信用ならぬ男だと、コリドンはフィリスに警告する。パリデルは『妖精の女王』に登場するパリスの子孫で色好みの騎士を指す。シェンストンは1755年1

月10日付けのレディ・ラクスバラ宛書簡で、彼女の非難（内容は不明）に答える形で「伊達男のパリデル卿」を登場させたのはユーモアを出すためと弁護している。(15) ともあれコリドンはパリデルに強烈な嫉妬を燃やしながらも、フィリスが彼に惹かれていくのを止めることができない。

第四牧歌「失望」でコリドンは、フィリスは不実で自分は打ちのめされたという台詞を三度繰り返し、「露の撒き散らされたバラの香り、つぶやくように流れる川のせせらぎ、孤独から流れ出る平安」(The sweets of a dew-sprinkled rose, / The sound of a murmuring stream, / The peace which from solitude flows, ll. 33-5) を今後の主題にしようと語り、世を捨てるように森の内奥に入っていく。

「牧歌風バラッド」は「愛の進展」に比べると、具体的な自然描写に満ちており、話の流れも納得できるものになっている。ドズリーの『詩選集』第四巻を評した『エジンバラ・レビュー』は、「牧歌風バラッド」が 그레이の「挽歌」に次いで優れた作品だと激賞し、「感情の平穏さと簡素さ」をともなった表現の雄弁さをその美点にあげている。(16) また『マンズリー・レビュー』は『シェンストーン作品集』を評して、シェンストーンは「牧歌風バラッド」によって「優美な簡素」を備えた詩人という名声を得たと記している。(17)

ジョンソンは「この作品が牧歌であることを惜しまずにはいられない」と腐しながらも、牧歌嫌いの彼には珍しく四篇の牧歌から満遍なく引用して褒めた後で、シェンストンの長所は「平易さと簡素さ」であり、短所は理解力と多様性に欠けることだと評価を下す。(18) シュワードもシェンストーンが真の牧歌詩人であり、ウェルギリウスやポープに欠ける「優美な簡素」を備えていると同時に、スペンサーやゲイやフィリップスのように、自然を描きながらも粗野に陥ることがないと称賛する。(19)

十八世紀の四人の評者は共通して「簡素」をシェンストンの長所にあげている。「簡素」は古来牧歌に欠かせない要素として重要視されてきたが、シェンストンの「簡素」は文体が平易であることに加えて、表現される感情の動きが分かりやすく、深みはないが万人向けということを意味する。セイントペリはシェンストーンを「技巧的な自然風の文体」の巨匠と呼ぶが、長じて「牧歌風バラッド」を再読すると「共感するよりも微笑を禁じえない」と評している。(20) これは若書きという意味であろう。

シェンストーンはエレジー、オード、牧歌など種々のジャンルを試みているが、文体と内容はほぼ一定しており、どの作品でも具象的な（一部は人工的な）自然描写

を背景に、語り手のそこはかかない悲しみが描かれる。「牧歌風バラッド」は登場人物の名前や舞台設定など、牧歌の伝統を部分的に踏まえてはいるものの、ポーブ風の古典的牧歌とも、フィリップス風の英国風牧歌とも大きくかけ離れている。シェンストンは「ある種の牧歌について」と題された短詩で「汝の歌は粗野で耳障りだと、うんざりした聴衆は断言する、歌うのはアルカディアの羊飼いでなく、モーと鳴く彼の牛たちなのだ」(So rude and tuneless are thy lays, / The weary audience vow, / 'Tis not th'Arcadian swain that sings, / But 'tis his herds that low.)と双方の牧歌を否定する。

シェンストン流の牧歌風バラッドを称揚するエイキンは『作詩法に関するエッセイ』(1772)で、「牧歌はもっと恵まれた気候の産物であり、かの地の自然の相貌や人々の暮らしは、北方の我が国のそれとは大きく異なる。穏やかなアルカディアやシチリアの野原では実在するものも、この地ではまったくの虚構にすぎない」と主張した。その傍証としてエイキンは、古典牧歌の羊飼いに「英国の農夫の粗野な話し方や下品なふるまい」を接ぎ穂した牧歌が不首尾に終わったことをあげ、土着的で野卑な羊飼いを主人公とするゲイの『羊飼いの一週間』やラムジューの『高貴な羊飼ひ』を否定する。エイキンは「バラッドを手本にして書かれた牧歌は、牧歌のなかで最も快い作品になりうる」と結論づける。(21)

事実、十八世紀後半の英国において、シェンストンの「牧歌風バラッド」から影響を受けて書かれた作品は、枚挙に暇がないほどの隆盛を誇った。その多くは牧歌と言うよりも、自然描写を中心にして他愛のないロマンスが描かれる小品である。テオクリトスやウェルギリウスは忘れられ、古典牧歌のさまざまな規範は無視されるようになっていったのである。

(3) ジョン・カニンガムの牧歌

ジョン・カニンガム(1729-73)はダブリンでワイン樽製造業者の子として生まれ、ロンドンやエジンバラで売れない役者稼業を経た後に、ニューカースル・アポン・タインに居ついた詩人である。彼の『主として牧歌からなる詩集』(1766)はニューカースルで出版されると、すぐさまロンドンとダブリンでも出版され、1771年には増補された第二版が出た。(22) 第二版には93篇の短詩が収められているが、題名とは裏腹に「牧歌」と題された作品は13篇にすぎない。

詩集の冒頭を飾るのは「朝」「昼」「夕」の三部で構成される「一日、牧歌」であ

る。「朝」で雄鶏が雌鳥に近づきながら時をつくると、朝日が村の尖塔を黄金に染め、ナイチンゲールがイバラを離れ、ヒバリが空に舞い上がり、ツバメが軒先から飛び出す。仔山羊がヒナゲシを齧り始め、蜜蜂が花から蜜を吸い、羊が朝食を待ちわび、コリンは小麦の出来を心配するが、猟師の角笛が彼の笛の音をかき消す。描写の中心となるのは、朝を迎えて沸き立つ生物であり、羊飼いとおぼしきコリンは風景の中に埋没してしまっている。「昼」と「夕」も同じ調子である。『クリティカル・レビュー』はこの詩を全文引用して「好ましいイメージに満ちており、著者が生き生きとした想像力を持っており、現代の第一級の描写詩人たちに伍するに値することが十分に示されている」と評している。(23)

「満足、牧歌」では、不毛の荒地をさまよう語り手が道に迷って絶望していると、女羊飼いが現われて自分の家に誘う。そこは黄色い麦束や緑のイグサ、甘いスイカズラや芝生に飾られた質素な住居であった。語り手はたちまち素朴だが魅力的な彼女の虜となり、「私は富裕な者を拒み、大いなる者を否定した」(I've rich ones rejected, and great ones deny'd, l. 15)。語り手は彼女と数頭の羊を世話し、川の畔で彼女の胸によりかかって眠りに落ちる。また二人は勾配のゆるい丘を歩き回り、細流が滴り落ちる岩場で休んで、新たな詩の主題を見出す。壮麗さや傲慢な称号に憧れることのない彼女は、羊飼いたちから「満足」と名づけられていた。

女羊飼いは牧歌の寓意とも考えられるが、この詩について『ジェントルマンズ・マガジン』は「描写は自然で印象的、韻律はとても音楽的」と評している。(24) また『マンスリー・レビュー』はこの詩を引用した後で、カニンガムは今後の詩作を「森の詩神のくつろいで慎ましいが、快い散歩道」に限定すべきだと忠告している。(25) 自然描写に徹した「一日」に比べれば、「満足」は簡素と無垢を主軸とする牧歌を寓話として描いたものと言えるが、いずれも古典牧歌からはほど遠い。

「フィリス、牧歌」で、語り手は「栄光が私の歌を輝かせる主題」(A Theme, / Where Glory may brighten my Song, ll. 3-4)を与えよと詩神たちに祈願するが、パーンは高遠な教訓を物語るなど命じる。「私」が愛するフィリスは牧歌を愛しており、野心は羊飼いにふさわしくないというのである。自注によれば、パーンの正体はカニンガムに牧歌詩人の道を進めと手紙で忠告したというシェンストーンである。(26)

「コリドン」で、カニンガムは「牧歌風バラッド」の羊飼いの名を借りて、フィリスの恋人であったコリドン(シェンストーン)の死を悼む。彼から好意を受けたこと、彼が鳥のために木々を植え、蜜蜂のためにタイムを栽培したこと、詩人たちが

こぞって彼の歌に耳を傾けたことなどを語る。最後にカニングムは「私にコリドンの笛を譲ってくれ」(give me my Corydon's Flute, l. 31)と、牧歌詩人シェンストンの衣鉢を継ぐことを願う。

他の牧歌もシェンストンの影響下にあり、いずれも常套表現だけで構成され、きわめて微温的である。恋人たちはほとんど何の障害もなく結ばれ、恋の苦しみがあつたとしても、表面的なものにすぎない。ラドクリフはカニングムの牧歌が「地理的な個性を拒否し、限定された範囲の語彙と、簡素であると同時に人工的、親しみやすいと同時に風変わりなイメージを採用している」と要約する。(27) だが同時代の批評はみなカニングムの牧歌に好意的で、時代の嗜好もまた変化していることは明らかだ。

(4) エドワード・ウィリアムズの牧歌

ウェールズ南部のグラモーガンで石工の子として生まれたエドワード・ウィリアムズ(1747-1826)は、長じて詩歌に興味を示すようになり、筆名を「ヨロ・モルガヌグ」(グラモーガンのネッド)と名乗って、ウェールズの古詩から題材を得た作品(贋作を含む)やドルイド教に関する膨大な著作を残した。(28) ウィリアムズの『詩集、抒情詩と牧歌』(1794)は、二巻本で百篇以上の雑多な詩を収めているが、作品はどれも凡庸な出来に終わっている。(29)

むしろ興味深いのは、きわめて挑戦的な序文であり、それぞれの詩に付された簡潔な注である。ウィリアムズは序文でパトロンからの援助が受けられなかったことに憤慨して、自分は「自学自習した渡り歩きの石工の本物の洗練されていない産物」を読者に提示するのだと言い切る。ウィリアムズがかなり狷介な人物であったことは、自注のあちこちに散見できる。

「ウェールズ風牧歌」と題された作品は複数あるが、「奥まったあずまやで見つけた」(An arbour squester'd I found)で始まる詩では、語り手が恋人のフィリスに向かって、時は短いから今のうちに楽しもうと説く。これは明らかに「カルペ・ディエム」を主題にしている。ところがウィリアムズは「ウェールズ風」の注として「他の面では欠点に見えるかもしれないが、ウェールズの詩的趣味には、ギリシアやローマの詩人が神話や感情や風景から引き出した馬鹿げたものは何も存在せず、あるのはただ英国〔詩人〕の自然な成長である」と述べるのである。

やはり「ウェールズ牧歌」という副題を持つ「山の牧人」で、語り手は六月の最

初の朝にディーリアへの想いを一羽のツグミに託す。ツグミは語り手の情熱的な歌をディーリアに伝え、六月の三度目の朝に二人は結ばれることになる。ウィリアムズは注でウェールズの詩歌、特に恋歌には「強烈な隠喩、奔放で急な展開、風変わりな時に空想的な擬人法」が見られると記しているが、「山の牧人」にこれらの特色が当てはまるとは思われない。

「祭日の賞品、牧歌」では、快樂主義的なストレフォンと禁欲主義的なコリンが歌合戦を行う。ストレフォンが酒宴や狩り、草競馬や舞踏を好む一方で、コリンが愛するのは恋人と森を散歩したり、花の咲き乱れる庭で鳥の歌に耳を傾けることである。またストレフォンがクロリスと茂みを歩き、フィリスを愛撫し、アミンタの魅力的な体を讃え、野原で一番の美女を妻にすると豪語するのに対して、コリンはディーリアだけを愛し、二人は婚姻の絆で結ばれることになる。最後に衆目は一致して、コリンに遠い国から伝来した笛を賞品として授ける。あまりにも図式的だが、ウィリアムズの意図するところは明白で、ゲイが描くような奔放な羊飼いは否定される。

「幸福な農夫、牧歌」では、美しい谷間の農場に住む語り手が、農耕や牧畜、果樹や草花の栽培に精を出し、野ウサギを銃で撃ち、川でマスを釣り、貧しい者には施しを忘れず、名声や華美を求めずに安らかに暮らすと語る。これは古代からある田園生活の喜びを綴った作品にすぎないが、ここで付けられた注はウィリアムズの牧歌論という様相を呈している。

彼は言う。牧歌は種々の主題を許容するから、現代の詩人たちのように主題を恋愛に限定する必要はない。羊飼いは「自然の見本にして自然の弟子」なのだ。「自分の知らないことを語ることを愛する」批評家たちは牧歌を嘲笑するが、それは牧歌とは名ばかりの「馬鹿げた不自然なラブソディー」によって引き起こされた。牧歌と称する作品にはグラップ・ストリートにしか存在しない風土の描写が見られ、たとえばポーブは第一牧歌で「三月の堇と六月の薔薇が同時に咲いている」風景を描いている。また我々には何だか分からない「黄金時代」という観念が、多くの人々に牧歌を軽蔑させる結果となった。ここでウィリアムズがポーブを貶している手法は、ポーブが牧歌論争において「彼の薔薇、百合、水仙は同じ季節に咲いている」とフィリップスの牧歌をあげつらった手法と同じである。(30) ポーブの牧歌の基本原理である「黄金時代」もあっさり否定される。

「抒情的牧歌」という副題を持つ「別れ」は、コリンが何らかの理由で故郷を離れた後に、ディーリアと再会を果たして互いに愛を確認しあうという作品である。

ウィリアムズの注はここでも激烈である。シェンストンの『牧歌風バラッド』は、テオクリトスやウェルギリウスの牧歌よりもはるかに自然である。ウェールズの詩人である自分は「自然以外の権威を認めない」し、ウェールズの羊飼、農夫、牛飼いは恋人を讃えるのに、自分たちのお気に入りの曲に新たな歌詞をつけて野原で歌うのだ。だが自分たちに固有のものよりも、他の国や風土や時代を描くべきだ（異国風牧歌を指すのであろう）と主張する者たちがいる。「ブラヴォー、我がすばらしき批評家たち！」と恐れを知らぬウィリアムズは締めくくる。

ウィリアムズの鋭い舌鋒は、当然のことながら、定期刊行物の書評家たちを怒らせることになった。『マンスリー・レビュー』は「祭日の賞品」を悪い作品ではないとしながらも、ウィリアムズがポープの牧歌を否定するならば、「ストレフォンやフィリスの代わりにウェールズ風か英国風の名前」をつけるべきだったと、ウィリアムズのウェールズ鼻根を皮肉っている。(31) またウィリアムズは「幸福な農夫」の注で、詩人に欠かせない三題歌(Triades)は「自然を見ることのできる目、自然を感じることのできる心、断固として自然に従おうという決意」であると断言した。『クリティカル・レビュー』はこれを踏まえて「大衆を尊敬せよ。発言は控えめにせよ。批評を軽蔑するな」という新たな三題歌をウィリアムズに送った。(32)

ウィリアムズは古典牧歌の流れを組むポープの牧歌を否定したが、同時にフィリップスやゲイの土着的な牧歌からも距離を置いている。ウィリアムズはシェンストンの牧歌を模範にしており、彼の作品の大半はシェンストンの「牧歌風バラッド」と同じ詩形を用いて書かれている。さらにウィリアムズは序文において、シェンストンの牧歌を称賛するエイキンの「作詩法に関するエッセイ」に感銘したと記している。確かにウィリアムズはウェールズの詩歌を称揚し、彼の牧歌には「ウェールズ風」と題されているものが少なくない。ただし地方色はかなり希薄であり、作品の大半はありふれた草花や風景の描写に費やされている。申し訳程度にコリンやディーリアといった恋人たちが登場するものの、彼らの存在は風景画を飾る一つの要素でしかない。

これまで論じてきた四人の詩人のなかで、最も大きな影響力を及ぼしたのはシェンストンである。田園を舞台にして感傷的な恋物語を綴るシェンストンの「牧歌風バラッド」は、袋小路に陥ったポープ流の古典風牧歌の模倣から詩人たちを解放した。またフィリップスが道を開いた英国風牧歌は、ゲイの『羊飼いの一週間』やラムジーのスコットランド牧歌を経て、各地の方言を用いて郷土の自然や慣習を、いささか野卑に描く地方色牧歌に発展した。ところがシェンストンの牧歌には地方色

も希薄で、彼の描く羊飼いたちは飲んだくれたり、卑猥な冗談を飛ばすこともない。さらにカニングムやウィリアムズの牧歌に顕著に認められるのは、あふれんばかりの自然描写であり、羊飼いたちは主役の座から追われてしまっている。

従来の牧歌がヒロイック・カプレットの形式で書かれていたのに対して、シェンストーンに学んだ詩人たちは八行を一連とするスタンザ形式を多用した。また牧歌は小さな劇のように羊飼いたちの対話で構成されるのが普通であったが、牧歌風バラッドはひたすら詩人や語り手の語りに終始し、羊飼いが台詞の形で肉声を発することはほとんどない。このような特質を備えた牧歌風バラッドは、もはや牧歌というよりも自然詩に接近したと考えることができよう。

注

- (1) “Letter from Lord Lyttelton to Bubb Doddington, Esq.,” *The European Magazine and London Review* 32 (July, 1797) 8
- (2) Samuel Johnson, *The Lives of the Most Eminent English Poets; With Critical Observations on Their Works*, ed. Roger Lonsdale, 4 vols (Oxford: Clarendon Press, 2006) 4: 190
- (3) *A Collection of Poems. By Several Hands. In Three Volumes* (London: R. Dodsley, 1748) 2: 1-18.
- (4) George Lyttelton, *The Progress of Love* (London: L. Gilliver, 1732)
- (5) *Theocritus*, ed. & trans. A. S. F. Gow, 2 vols, 2nd ed. (Cambridge: Cambridge University Press, 1952), Virgil, *The Eclogues*, trans. Guy Lee (Harmondsworth: Penguin, 1984)
- (6) *The Poetical Works of George Lord Lyttelton* (London: Cadell & Davis et al, 1801)
- (7) Rose Mary Davis, *The Good Lord Lyttelton* (1939) 100., William Prideaux Courtney, *Dodsley’s Collection of Poetry: Its Contents & Contributors* (1910; New York: Burt Franklin, 1968) 17.
- (8) Nicholas Rowe, “Colin’s Complaint,” *Poems and Translations. By Several Hands* (London: J. Pemberton, 1714) 88-91.
- (9) Richard Graves, *Recollection of Some Particulars in the Life of the late William Shenstone, Esq.* (London: J. Dodsley, 1788) 103-4.
- (10) Robert Dodsley, preface, *The Works in Verse and Prose of William*

- Shenstone, Esq.*, 2 vols (London: R. & J. Dodsley, 1764) 1: 1.
- (11) *Letters of William Shenstone*, ed. Duncan Mallam (Minneapolis: The University of Minnesota Press, 1939) 59, 65, 70.
- (12) D. Nichol Smith, "The Early Version of Shenstone's Pastoral Ballad," *RES* 17 (1941) 47-54., A. J. Sambrook, "Another Early Version of Shenstone's Pastoral Ballads," *RES* 18 (1967) 169-73., F. D. A. Burns, "The First Published Version of Shenstone's 'Pastoral Ballads'," *RES* 24 (1973) 182-5., *The Correspondence of Thomas Percy and William Shenstone*, ed. Cleanth Brooks (New Haven: Yale University Press, 1977) 239-306.
- (13) *A Collection of Poems in Four Volumes. by Several Hands* (London: R. & J. Dodsley, 1755) 4: 354-63.
- (14) *Letters*, 327., *The Letters of William Shenstone*, ed. Marjorie Williams (Oxford: Basil Blackwell, 1939) 439., *The Correspondence of Robert Dodsley 1733-1764*, ed. James E. Tierney (Cambridge: Cambridge University Press, 1988) 186-7.
- (15) *Letters*, 309.
- (16) *Edinburgh Review, for the Year 1755*, 2nd ed. (London: Longman, 1818) 51-2.
- (17) *Monthly Review* 30 (1764) 378.
- (18) Johnson, *Lives*, 4: 129-31.
- (19) *Letters of Anna Seward*, 6 vols (Edinburgh: Archbold Constable, 1811) 3: 138-9.
- (20) George Saintsbury, *The English Poets*, ed. Thomas Humphry Ward, 4 vols (London: Macmillan, 1881) 3: 271.
- (21) John Aikin, *Essays on Song-Writing*, 2nd ed. (Warrington: William Eyres, 1774) 31-2, 39
- (22) John Cunningham, *Poems chiefly Pastoral*, 2nd ed. (New Castle: T. Slack, 1771)
- (23) *Critical Review*, 21 (1766) 229.
- (24) *Gentleman's Magazine*, 36 (1766) 193.
- (25) *Monthly Review*, 34 (1766) 355.
- (26) *Poems chiefly Pastoral*, 25.

- (27) David Hill Radcliffe, “Sawney and Dermot: Locality and National Identity in Irish and Scottish Eclogues,” *Anglo-Irish Identities, 1571-1845*, eds. David A. Valone & Jill Marie Bradbury (Lewisberg: Bucknell University Press, 2008) 89
- (28) *Eighteenth-Century English Labouring Class Poets 1700-1800*, eds. Tim Burke et al, 3 vols (London: Pickering & Chatto, 2003) 3: 275-6.
- (29) Edward Williams, *Poems, Lyric and Pastoral*, 2 vols (London: J. Nichols, 1794)
- (30) *The Guardian*, ed. John Calhoun Stephens (Kentucky: The University Press of Kentucky, 1982) 161.
- (31) *Monthly Review*, new series 13 (1794) 412.
- (32) *Critical Review*, new series 11 (1794) 175.

本研究は科研費(23520317)の助成を受けたものである。